

日本・ノルディック諸国シンポジウム

雀部 実

千葉工業大学

会議は大成功だった！

この会議の正式名称は、The 5th Japan-Nordic Countries Joint Symposium on Science and Technology of Process Metallurgyである。当初は日本とスウェーデンの2国間のシンポジウムで、東京とストックホルムで約5年毎に交互に開催されていたが、第4回（東京開催）からノルディック諸国（実質的にはスウェーデン、フィンランド、ノルウェー）に拡大され、今回はフィンランドのエスポ市で開催された。エスポ市はヘルシンキの衛星都市で、ヘルシンキ工科大学を中心とした研究学園都市である。距離的には、「本郷もかねまつまでは江戸のうち」くらいの感じで、旅行者感覚では、ここはヘルシンキそのものである。

このエスポ市にイノポリ（Innopoli）会議場という立派な施設がある。イノポリとはInnovative Policeを念頭においた新造語だそうである。会議場の諸設備は非常に配慮され、日本での超一流の会議場に匹敵するものである。たった一つの難点は、北欧の人達の体格に合わせて設計されているために、何もかも背高のつば用であって、日本人にはいささか使いにくい点である。例えば、OHPフィルム上で何かを説明しようとする、フィルム面がほぼ目の位置の高さのところにあって、記入された内容は背伸びをしないと見えないのである。



写真1 会議場外の風景

このイノポリ会議場で、学会形式の会議を丸2日間（1992年9月14、15日）行なった。会議のテーマは、製鉄から铸造までの内容のものとなった。先方の提案に極力沿う内容となるよう日本側の論文を調整したことと、団員の研究実

力と語学力それに強心臓がうまく作用して、討論は極めて活発であった。ノルディック側参加者から「今回の会議は大成功だ。5年後に是非日本で開催して欲しい。」と、繰返し聞かされ、また、公式にもそのような申し出があった。



写真2 会議場風景

見学会も素晴らしい！

会議の後、団員は3人から5人程度のグループに分れて、それぞれのグループが興味を持つフィンランドおよびスウェーデンの工場見学を行なった。この見学は、日本側にとっていろいろな意味で、実りの多いものであった。国のおかれた状況に合わせてうまくやっていること、いくつか素晴らしい技術が見られたこと、などを、再集合した団員が語り合っていた。北欧では、夏季に6週間、高炉をバンキングして全員休暇に入ってしまうのが常識とのことで、高炉の専門家達はうらやましがったり、バンキング解除後の操業を心配したり、と複雑な表情を見せていた。

見学先では、皆さん本当に親切にして下さった。ある工場では、私たちが到着する半日前に大ブッレークアウトがあって、てんやわんやの真っ最中であつた。連続铸造機の配線ケーブルはほとんど焼損してしまっていた。そのような中で、接待をしてくださり、また、復旧作業中の事故現場を、隠さず見せて下さった。日本であったら、絶対に見られないそうである。

工場見学の途中も、また、貴重な見学であつた。周りの風景が「おとぎの国のような」と感激するグループや、北極圏近くの工場を訪問し野性のとなかいと出くわしたグループ、高速道路を150km/hで3時間もボルボの操縦性を自ら

確認したグループ、など、再集合した時の会話の賑やかさは、皆がすっかり北欧のとりこになってしまったことを現していた。

再集合地はストックホルムで、ここからヘルシンキまではクルージングで戻った。5万tクラスの豪華客船で、一晚をすっかりリッチな気分で過した。ストックホルムからヘルシンキまで飛行機で行ってホテルに宿泊する場合と値段はあまり変わらない、とのこと、これは再挑戦の価値があると思っている。

パーティー、パーティー、またパーティー！

日本人の宴会好きにつきあってくれた訳ではないと思うが、連夜パーティーであった。これまた、通り一遍のものではなく、工夫して楽しませてくれた。おおよそのパターンは、正式の晩餐会があって、それがいつのまにか2次会になってドンチャン騒ぎとなる、というものであった。ここにのせた写真は、イエルンコントレット（Jernkontoret＝スウェーデン鉄鋼協会）主催のパーティーの一駒である。衣裳を着けているのは、王立工科大学の学生たちである。これらのバンドとダンシングチームのショーを楽しんでいるうちに、こんなになった。「来週は鑄造実験で会社に出張するんだ。」という学生も入っている。

晩餐会で忘れられないのは、「となかい」のステーキである。北欧特産の木の実で作ったジャムをつけて食べる。高級な料理だそうで、最初のうちは感激していた。しかし、1週間続けて毎晩(時には昼も)、となると、仏の顔も二度三度である。今年のサンタクロースは乗物がないな、と思うほどご馳走になった。

ところで、全体のご感想は？

イエルンコントレットを訪問した際、会長のニキスト(Nyquist)博士がスウェーデンの鉄鋼の歴史を古代から現代まで、約1時間かけて説明してくれた。この話を一言にまとめると、「スウェーデンは常にその時代の最高級品を生産し



写真3 イエルンコントレット（スウェーデン鉄鋼協会）主催のパーティーの一駒

て利益を上げてきたが、第2次大戦後バルクスチールを志向して衰退しかかった。最近は再び高級品を志向し、いきおいを取戻しつつある。」というものである。会議での研究者の意気込み、見学先での感触などから、博士の説明は強がりではないことを理解できた。ノルディック諸国は、鉄鋼業を捨てることはせず、生産量ではなく技術力で、再び世界の指導的立場に立つ可能性の大きいことが、感じられた。

会議の成功はヘルシンキ工科大学のホラッパ(Hollappa)教授の努力によるところが大きい。また、日本鉄鋼協会国際室とイエルンコントレットの事務局との緊密な連絡も会議を成功させる大きなポイントであった。任にあたられた皆様に厚くお礼を申し上げる。また、見学にあたりいろいろお世話をいただいたノルディック側各社の方々にも厚くお礼を申し上げる。

(平成5年1月12日受付)